
Three Dementions Complex - 恋 -

宗像竜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Three Dementions Complex -恋-

【コード】

N9506M

【作者名】

宗像竜子

【あらすじ】

彼を想う、この気持ちに名前をつけるとするのなら、一体何が相応しいのだろう……？
『恋』をテーマにした、近未来の物語。

わたしは、彼の名前すら知らない。

+ + +

「いらつしゃいませ！」

彼はいつもの笑顔で私を迎えてくれた。

行き着けの店。仕事帰りにふと一息つきたくなるとわたしはここを訪れる。

常連とまではいかないけれど、彼のいるファーストフードのスタンドは、いつもなんだか入りやすい雰囲気があるのだ。

「ご注文は何になさいますか？」

彼の笑顔は失礼のない程度に明るく、声は耳に心地良く通る。

「コーヒーを。…ブラックで」

（あなたを。…一緒にいて）

心の中で思わず呟いた言葉。

もちろん、そんな事口にはしないけれど。でもたまに…無性に言いたい衝動に駆られる事がある。

「かしこまりました、少々お待ち下さい」

にっこりと笑って、彼は言い、一度その姿を消す。

もし、心の中で引き止めた言葉を、口にしたらどうなるんだろう

？
何となく、その予想はつくけれど。
きつと、あなたはその笑顔を少し曇らせて、本当に申し訳なさそうに言うに違いないのよ。

「申し訳ございません。そのご注文は承れません」

…って。

+ + +

本当の所を言うと、わたしはずっと彼の笑顔が好きではなかった。

誰にでも分け隔てなく向けられる営業スマイル。その作為的な笑顔が嫌いだった。

それは、本心からのものではない。それは、誰が相手でも得られるもの。つまり、わたしが彼の『特別』な存在でない事と同義だから。

「お待たせいたしました」

そんな言葉と共に、湯気が立ち昇る淹れ立てのコーヒーが差し出される。

それを受け取って、支払いを済ませる間、彼はずっとその笑顔を崩す事はない。

この笑顔を見る為だけに、わたしは特に飲みたくもないコーヒーを注文し、言われるままに支払う。なんて滑稽なのだろう。

これはきつと、『恋』なんかじゃない。

けれど、彼の笑顔を見るとなんだか安心するのは確かな事。

彼の『特別』になっってしまうえば、きつとあの笑顔だけを見る事は出来なくなるだろう。そう思うと、心の何処かがすっと冷える。

笑顔でない彼を想像出来ない。そうでない彼を見たいとも思わない。

もちろん、自分がその『特別』になればしない事もよく自覚してもいる。それでも、そんな事をふと考えてしまふ自分を止められもしないのだ。

想うだけなら、誰にも迷惑はかけない。そんな、自分勝手なこの想いに名前をつけるなら、やっぱりこれは『恋』ではないと思う。それでも、わたしはこれと言って特に美味しいという訳でもない。コーヒーを注文しに、ここへとやってくるだろう。恋焦がれた恋人に会いに行くように。

雨の日も風の日も。雪が降った日も、何か特別な日でも。

ひよっとしたら、地球最後の日のような時でも、きっと変わる事のない不変の笑顔と声を求めて。

+ + +

ファーストフード業界が完全に無人制を取ったのは、比較的近年の事。

注文を受けると、機械によって全自動的に調理が行われ、同時に立体映像を駆使した接客プログラムが客を相手する。

この機械化により、人件費は大幅に削減され 不思議な事に、売上も飛躍的に成長する事になる。

当初、「人間味」がなくなる、と危惧された声とは裏腹に、人々は店に入り、思い思いに注文して行く 淡々と。

「人間は相手が誰であっても、またどんな場面においても変わらぬ態度というものに安心するものです」

と、誰かがその現象を評した。

「誰だつて、自分以外の誰かが鼻^{ひいき}屑されるのは、やっぱりいい気分にはならないものでしょう？ それに、何かあっても相手が機械だと思つと、かえつて腹も立たないものです。怒つても相手はわかりはしないのですから」

+ + +

「いらつしゃいませ！」

明るい声が、出迎える。

失礼のない程度に止められた笑顔が私に向けられる。

そしてわたしは…恋に焦がれたように、欲しいわけでもないコーヒーを注文する。

全てが偽りだと、知りながら。彼が現実の存在でないと、知りながら。

名があるのかも知れない彼を想う、この気持ちに名前をつけるとするのなら、一体何が相応しいのだろう……？

(後書き)

これも昔、(六年くらい前?)リンク先の方に献上した作品です。ちょうどその方の所で「恋」をテーマとした企画があっっていて、元々はその参加作品として書いていたものですが、わたしが年末からお正月と多忙になり、企画には間に合わなかったので、そのお詫びとして献上したのです。

という事で、これは一応「恋」をテーマにした作品です。

タイトルを直訳すると「三次元コンプレックス」となりますが、これはわたしが勝手に造った造語です。

「二次元コンプレックス」ってのがありますが、それが進化した形
∴ みたいなものをイメージ。

平面の、実在しない人物に恋をする「二次元コンプレックス」と立体の、実在しない人物に恋をする「三次元コンプレックス」。

対象が微妙に変わっただけで、根底にあるものは同じ。

「恋」をテーマにして話を書く場合、大抵は甘いイメージがあると思います。

でも私は天邪鬼なので、まったく逆で表現してみました(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9506m/>

Three Dementions Complex - 恋 -

2010年10月12日07時40分発行